定年を迎える教授の特別寄稿

昭和大学での12年間

加藤　裕久

薬学部 臨床薬学講座
医薬情報解析学部門

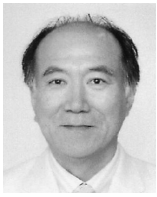
１９７７年（昭和52年）に昭和大学薬学部を卒業し、東京逓信病院、国立埼玉病院、国立病院医療センター（現国立国際医療研究センター病院）、国立療養所西群馬病院（現渋川医療センター）、そして国立がんセンター中央病院（現国立がん研究センター中央病院）で勤務し、31年間の病院薬剤師生活を送りました。

２００８年度（平成20年度）から母校に戻り、薬学部医薬情報解析学部門（旧医薬品情報学教室）を担当することになりました。医薬情報解析学部門は、昭和大学薬学部が目指す臨床薬剤師の育成に向けて新たに発足した部門であり、薬学部と臨床現場の橋渡しになるよう努力してまいりました。学部生はもちろん、大学院生の教育・研究の指導にも努め、12年間に大学院前期課程（修士）１名、大学院後期課程（博士）16名（予定含む）の研究を指導しました。

大学では、２０１２年度（平成24年度）に文部科学省の専門的看護師・薬剤師等医療人材養成事業の「地域医療に貢献する臨床指導薬剤師の育成プログラム」が採択されました。さらに、２０１４年度（平成26年度）に文部科学省が公募した、「課題解決型高度医療人材養成プログラム」に応募し採択された「大学と地域で育てるホームファーマシスト～患者と家族の思いを支え、在宅チーム医療を実践できる薬剤師養成プログラム～」の運営に学部の枠を超えて取り組むことができました。さらに、厚生労働科学特別研究事業として「注射用抗がん剤等の適正使用と残液の取扱いに関するガイドライン作成のための研究」により、安全性と医療経済性の両面からわが国のがん治療における適切性に少なからず貢献できました。

昭和大学を定年退職するに当たり、これまで多くの皆さまにご指導いただきましたこと心より感謝申し上げます。最後に紙面をお借りして、医薬情報解析学部門の運営に献身的に貢献くださった小林文先生、半田智子先生、山本仁美先生に厚く御礼申し上げます。昭和大学の更なる発展を心よりお祈り申し上げます。

退任にあたり



佐々木　忠徳

薬学部 病院薬剤学講座

昭和大学藤が丘病院薬局に入職してから数えて41年、２０２０年（令和２年）３月をもちまして定年退職となりました。１９９４年（平成６年）に薬学部に異動となり基礎研究に従事する一方で、臨床系薬学部の構築に関わることになり約７年間薬学部に在籍しました。その間、山元俊憲前薬学部長の指導で２号館の耐震工事を経て４講座が新たに加わり臨床系薬学部が創生され改組するという機会も経験させていただきました。その他、工藤一郎元薬学部長のリーダーシップにより薬学教育ワークショップが開催されるようになり、これを基に薬学教育６年制へと移行する激動の時期に、昭和大学を一旦退職し亀田総合病院に移りました。

２０１５年（平成27年）４月に13年近く勤めた亀田総合病院での勤務を終え、現職復帰しました。最も重要な任務は薬学教育が６年制導入後10年経過に伴い新コアカリキュラムに準拠した実務実習のプログラムの作成することでした。同年７月にはほぼ完成させ、その年度の２月には薬学４年生の実務実習１をスタートさせ、５年生の実務実習２へと繋ぎました。さらに本年度からは鳥山病院を活用した精神医療実習が加わり、学部連携実習を合わせて18週の実習へと発展しました。名実共に日本一の実務実習の完成であると思います。

卒後研修制度作成では、昭和大学の強みを活かし薬剤師教育のレジデント教育の充実化を図りました。２０１９年（平成31年）４月から臨床研修薬剤師（旧レジデント制度）を２年制として新たにスタートすることができました。薬機法改正において医療における薬剤師に役割が明確化されましたが、社会から地域医療への貢献や患者の健康管理への介入が望まれています。これらを実践する上でこの臨床研修薬剤師プログラムを修了した薬剤師が院内にとどまらず地域社会に大きく貢献してくれると確信しています。

今後は４月以降特任教授として微力ながら昭和大学に貢献できるよう継続して頑張りますので、よろしくお願い致します。

定年退職に際して

大幡　久之

富士吉田教育部

１９７３年（昭和48年）に昭和大学薬学部に入学し、現在の職場である昭和大学富士吉田校舎での学びが始まりました。以来、47年間の長きにわたり昭和大学に学び、微力ながら研究・教育に携わることができましたことを大変嬉しく思います。

これも恩師である薬学部薬理学教室（故）山田重男教授、百瀬和享教授をはじめ、多くの諸先輩、同僚、後輩に恵まれたためであり、ご指導とご厚情に心より感謝申し上げます。

１９７７年（昭和52年）、卒業と同時に卒業研究をさせていただいた薬理学教室に助手として入職しました。１９８３年（昭和58年）には、山田教授の退任に伴い、百瀬教授が着任され、その後の約20年間、薬学教育・研究の両面にわたりご指導いただきました。

研究面では、単離細胞を用いた研究の先駆者として平滑筋収縮機構に関する研究をご指導いただき、教育面では、薬学部の年限延長を見据えた薬剤師国家試験問題出題基準の改訂や１カ月の病院実習実施に向けて奔走されていた百瀬教授から多くの教えをいただいたことが強く印象に残っています。

２００４年（平成16年）、百瀬教授の退職に伴って本田一男教授が着任された際には、それまでの研究を継続しつつ、より臨床に直結した研究にも関わらせていただき、38年間の薬学部での教育・研究を締めくくることができたと感じています。

２０１５年（平成27年）４月から本年までの５年間は、富士吉田教育部の教育に携わる機会をいただき、改めて医療人としての第一歩を踏み出すための４学部が連携した学部連携教育の重要性を考える機会となりました。

医療人教育の原点である富士吉田で学び、薬学部教員として昭和大学に育てられ、四十余年後に再び富士吉田教育部での教育に携われたことはこの上ない幸せであり、心より感謝申し上げる次第です。

最後に昭和大学のますますのご発展をお祈り申しあげます。

マダガスカル口唇口蓋裂医療協力団報告会を開催

現地で19件の口唇口蓋裂手術を行う

令和元年度昭和大学マダガスカル口唇口蓋裂医療協力団報告会が１月31日、上條記念館で開催された。

本事業は、アフリカ大陸東部の島国、マダガスカル共和国で口唇口蓋裂に苦しむ子どもたちの医療支援として、２０１１年５月から毎年行われている。今回が９回目の派遣となり、19件の口唇口蓋裂患者への手術を行った。第１回から今回までの手術件数は、191件にのぼる。

同医療協力団は口唇口蓋裂手術の他、火傷による手指の瘢痕拘縮の治療も行った。マダガスカル共和国では生活で炭火を用いることが多いことから火傷が多い現状がある。

報告会では医療協力に参加した医師、歯科医師、看護師、学生がそれぞれの立場で経験したことを発表した。口唇口蓋裂の治療内容の他、マダガスカル共和国の医療現場の実情や現地での生活などについても発表があり、今後の課題や展望が述べられた。

報告会の様子

上條記念館に絵画が寄贈

―『鷺娘』―

２月17日、本学の医学部薬理学講座医科薬理学部門の兼任講師である村山舞氏（株式会社村山代表取締役）より絵画が寄贈されたことをうけて、感謝状の贈呈式が上條記念館で執り行われた。

寄贈された絵画は羽鳥絹世氏の作品「鷺娘（さぎむすめ）」（F100号）、恋の妄執に迷う娘の心を白鷺の姿に託して踊る歌舞伎舞踊の代表的な演目の一つを描いたものである。

寄贈された絵画は上條記念館の地下１階吹き抜けの壁面に飾られている。

医学堂書店
品川区
旗の台
電話(03)
3783-9774

健康応援オーケストラ
株式会社メディセオ
mediceo
東京本社/〒104-8464　東京都中央区八重洲二丁目7番15号 TEL/03（3517）5050（代）
URL/http://www.mediceo.co.jp